

第 177 回 6 月 23 日開催のプロトコル

1、前々回 第 176 回 のプロトコルについて

「意志において直観が成り立っている。」

<目的的统一> 一例として、水を飲みたい！

飲みたい（目的への意志がある）→行動→飲む（目的が実現する）

一連の流れのなかで、水を飲みたいという目的はずっと継続していて動かない。

意志の根本には直観があり、直観は動かない。

西田はプロチヌスを持ち出してきて意志と直観は根本的に一つであると言った。

哲学的問いについて

<直観の立場からすれば、「教育」するとはどのようなことであろうか。>との問いに対しての議論
問いの提案者が不在のため、問いの意図を推測しながら検討する。

出された意見

①、思い出す

プラトンのマテーシス（学習）はアナムネーシス（想起）を引き合いにすでに感じていたことを想起することに尽きる。

②、魂の向けかえ

プラトンの洞窟のたとえより

洞窟の中の囚人が照らし出される影絵をみて真実だと思っているのを、振り返り洞窟の外の真の光に目を向けさせる。

この時に、寺山修司の「あしたはどっちだ」を持ち出して、「そもそも明日がどっちか分からないのに教育者には道を示すことが出来るのか」と問いが出た。

これに対し、〇〇とは何か、など、おおよそ答えの出ないものに対して、分からない事が前提にあるのだけどそれでも前へ進めていくということまでひとまず落ち着いた。

③、背中を見せる

教育者とは善知識（仏教で言う、同行者）になること。

教えなくて修行する姿、学問する姿、その歩んでいる姿をみせること。

（私はこれを聴いて、先生と生徒の関係ではなく、師と弟子との関係がこれに当ると思った。師は弟子に対し同じ道を歩む先達としてその姿を弟子に見せ、自らもまた道を歩み続ける者として 体験し、気づき、学び、また実践し、自分の深化と共に世の中をより良き方向へ変換させていくものだと思った。）

2、テキストについて

「直観と意志」 P 4 4 6 行目冒頭 「私は直観ということは・・・から P 4 6 2 行目

・・・永遠に自己自身の中に留まるものでなければならぬ。」までを読む

P 4 4 6 行目～1 0 行目 「私は直観ということは～首尾相合して、一つの円を成す時、直観となる。」について

ポイント ・直観といふことは、主と客とが純なる一つの働きとなること

・精神的なるものが自己自身を発展することである

・直観といふことを、意志の形に於て理解し得る

・意志の極致が直観である

- ・精神は意志に始まって意志に終る
- ・首尾相合して、一つの円を成す時、それが直観となる。

何をしてもただ1つのことしかしていないし、その間は直観は動くことはない

→直観は静

「静」が全く分からないと意見が出た。静かに見ているのなら、既にそこに見ているという働きがあり、それは動いているのではないかという疑問。いい換えれば、静なんか無いのでは？と言うこと。

この時に出された問いが面白く以下に記す。

「動いている神羅万象を自分も含めてありのままに観ることが出来るとしたらその精神状態は動ですか静ですか」この問いに対し、静の人、動の人、同時に存在している人、どちらも否定の人 様々な返答を得たが、直観の立場、純粹に見るということから言えば意志は見つけられないと結論された。その後、動の原因が意志と言うところまで話が続き、なんと世界を動かしているのは自分だったのだ！まで話が進んだ。

P 4 4 1 0 行目～1 3 行目 「併し働くものを～無限の動と考へることができる。」について

ポイント ・万物は、すべてを包み、何物にも包まれない一者に於て直観せられる

おさらい

動は意志。静は直観。さらに一者に於いて動と静は同じ。

(ここの部分を読んだ後にしばし沈黙が続いたが、私はこの沈黙こそ全てを包むものだと観じた。言葉になる前、言葉で表される前の何か、たぶんそれが一者なのだったと思った。)

P 4 4 1 3 行目～P 4 5 4 行目 「併し意志は～first mover の如きものでなければならぬ。」について

ポイント・自己自身の中に不満を抱くもののみ、時を見る、自己自身に於て満足するものの中には時はない
エネルギー — 充実した満足の世界へようこそ—

自転車で湯田温泉へ行く の例

- 1、温泉へ着く時間を気にしながら自転車をこぐ→温泉に着くまで不満→時間を意識する、時の中にいる→温泉に着くという目的がと自転車をこぐという行為が一致しない。
- 2、余裕をもって温泉へGO！→途中の景色さえも楽しめる→自転車のひとこぎひとこぎが目的→自転車をこぐという目的とその行為が一致している→時を感じてない→満足！

P 4 5 4 行目～8 行目 「一者は無限なる作用の～不変なるものを見るといふことである。」について

ポイント ・外から見ることをやめて純なる作用になりきる。活動そのものになりきる。

そのことが永遠・不動のものを見るということ。真の自己とはなりきること。

水を飲みたい。意志があり直観は動かない。

湯田温泉へ行く。活動そのものになりきると満足していて時はない。

上記の2つの例は、1つの意志による1つの直観についての1つの流れに沿った話で、

これとは別に、意志をもってある行為に及んだ時に、結果が自分の意図に反して思いも及ばぬことが起こった場合もその意志は直観になるのか？ 意志に対し結果が自分の思いと異なる場合どうなるのかという問いが出た。(この問いは私の問いだったが、最後に唐突に”直観”が出てきて、ぶっとんだ問いだとされ、今回の読書会の中で一番の笑いをさそう発言になる。発言者にはぶっ飛んだ感覚は無かったので、この感覚の違いをととても面白く感じた。) この問いに対し、「偽我が意図している

ことを裏切る出来事というのは直観ではないか」と意見があった。

P 4 5 8行目～P 4 6 2行目 「永遠の真、永遠の美は～自己自身の中に留まるものでなければならぬ。」について

ジル・ドゥルーズの「動物になること」を持ち出して、動物になったら真我がぶれない、常に直観に従っていて満足と言う意見も出たが、西田はここでは人間の在り方について書いてあるので動物になれと言うことでは無いと意見が出た。

「無限なる我々の意志は一者の直観に達する過程である。」ここをどう読むかで議論された。過程とあるがこれをどうとらえるのかははっきりせず、今回の読書会では時間切れとなった。

3、哲学的問い 「直観と表現」に関して問いたい

一者（無限大の円）の中に高次から低次まで全ての次元が含まれているとして高次からの直観があった場合、それを低次の世界で表現できるのか。表現形態としては、言葉を使って直観を表すことを試みるがそれは可能なのか。私は、言葉はただ言葉であってそれそのものではないし、説明すればするほど、それそのものから離れていくので言葉で表すのは難しく観じている。そもそも言葉で表現するという以前に、低次が高次を表せるのか疑問に思う。例えば、3次元の立体は2次元の面を含んでいるので、面を表す場合、3次元の世界からは2次元を容易に表せるが、面しかない2次元の世界から立体の3次元を言い表すことが出来るのか分からない。2次元の世界の住人は考えることもなく世界は2次元だけで完結しているとし3次元の世界など普通は想像だにしないだろうから、低次が高次を表すのは難しく観じる。ならば、低次が高次を表すためには低次の世界を高次へと変換し次元を上げるしかないのではないか。こういったことも西田の言う「一者の直観に達する過程」（P 4 5 8行目）なのかもしれない。